



左から、蟹江一平(山口久右衛門)、蛭雪次朗(宮本金昨)、松田龍平(生田 信)、浅野忠信(柴崎芳太郎)、宇治長次郎(香川照之)、モロ師岡(木山竹吉)、仁科貴(岩本鶴次郎)、木村大作監督

---

**浅野忠信** まだ、終わったという実感が湧いていないですね。しばらくしてから、この仕事を乗り越えられたのを感じる事ができると思います。監督には本当に感謝しています。この経験を生かしてこの先を生きて行きたいと思っています。

山の中では、こんなでかい石は、どうしてここに在って、どうやって生まれてきたのかとか、この石の中は別世界と繋がっているんだとか、ここには、龍はゼツタイいる、天狗が出てくるぞ、と思わせるくらいなんか狂ってきて、劔の山で奇跡的にわれわれは生かされているんだと、5時間ぐらい、香川さんと本気で話したりしました。劔岳は陸地測量部に遠慮して、わざと1m低くしてくれたのではないか、などと感じたりしました。劔岳は、特に「位」が高い山のように実感しました。

去年、南壁に行ったとき、雨で最初の日は撮影できなかったけれど、次の日になって、晴れてやっと撮影できた事がありました。その時、柴崎芳太郎さんのおかげで、今は山に登れているのだなとつくづく感じました。

**香川照之** 山の撮影は3日前に終わったばかりで、まだ終わったなんて考えられないです。この映画は、人間を育てた映画だと思います。俳優もスタッフも頼もしくなったひとが何人もいます。一本の映画でこんなのは見たことがありません。世界遺産みたいな映画です。毎日命がけだったから。これを若い俳優・スタッフに、言葉にして伝えていくのがわれわれ年配者の使命だと思います。この映画を実現した木村監督には頭がさがります。

足が腫れ上がるまで登った日には、今日は本当に撮れるのかと、悩むこともありました。山に登ってもらわなければ、この気持ちは分からないと思いますね。それでも、ちゃんと予定の期日に撮り終えさせてくれた劔岳には感謝しています。

この映画は、ストーリー性がどうのこうのという種類の映画ではないんです。

宇治長次郎さんを演じましたが、地下足袋で雪の上を歩いたり、裸足で岩の上を歩いたりしてみて、劔に最初に登られた101年前の当時は、いかばかりの気持ちだったのでしょうか。新たためて認識させていただきました。

- 松田龍平 ここに来て、この映画に加わったのは幸せでした。ここで劔岳に登れたぐらいだから、これから何があっても大丈夫だと、自信になったと思います。  
霧が晴れなくて、いらだたしくなった事もありましたが、その後すごい景色が出たりしましたね。行きと帰りの山道の風景は、全然違っていました。
- モロ師岡 全て終わったという実感がありません。明日にでも「さあ 登るぞ」といわれて、そのまま登ってしまうかも知れません。  
自分の持てるものを、全部出し切ってしまったような気がしました。悔いのない仕事でした。  
山の中は不便で、トイレに行くのも大変でした。どこに行くのも長く歩いていかなければならないので、自分の中の欲望がどんどん削ぎ落とされて行き、だんだん真っ当になっていくような気になりました。
- 蛭雪次郎 出演者として冷静に言わせてもらおうと、最初から立ち会ってきた監督とスタッフは大したものですよ。本当にご苦労様でしたと心から言いたい。  
この土地の人の役をやらせてもらいましたが、役者がいろんなものを持ち込まなく自然なまま、違和感なくやっていけるテーマでした。  
それにしても、同じ姿の劔岳は1日としてなくて、飽きませんでしたね。
- 仁科 貴 木村監督には、大きなものを教わりました。この教わったものを、これから表現していくのには、僕にはまだ時間がかかるとは思いますが、監督・先輩に感謝し続けて行きたいと思います。  
山で待つ大変さと、山そのもの大変さを一度に学ばせて頂きました。山はほんとに生きていると思いました。
- 蟹江一平 たくさんのスタッフに支えてもらいました。今の気持ちとしては、いろんな助けを頂き、教えて頂いたという感謝の気持ちで一杯です。  
初めは山の大きな存在に、嫌われていたように思いました。プライベートで登山するかどうか分からないですけど、最後には山を愛する気持ちが出てきました。
- 木村監督 僕は嬉しいです。俳優さん達とも話したけど、スタッフも含めてこれに参加した全員がバカですね。人生の苦行に参加したね。単なる映画とは思ってなくて、自分の人生に役に立ったと思います。みなさん若いので、これからの糧にしてもらいたいですね。  
200日もスケジュールを空ける俳優さんなんて考えられる？。過酷な、辛辣などうしようもない世界によくぞ飛び込んでもらったと思うね。  
この映画は、劔岳に登っておしまい、という映画ではないですよ。柴崎芳太郎の選点した三角点の20点、全て登ってみて、その過酷さが分かりました。  
新田次郎は、悠久の自然の前で、人間ははかない人生であると書いているけれど、これに同感です。皆さん、人生は喜び半分、悲しみ半分、と思っていらっしゃるでしょうが、山はそういう人生を逆なでするように迫ってきました。今回の仕事で、もう自分は人生で思い残す事はありませんね。